

氏 名 : 溝江 唯
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 390 号
学位授与年月日 : 令和 4 年 9 月 2 7 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 自閉スペクトラム症幼児と定型発達幼児における象徴遊びの発達と発話表現の高次化に関する縦断的検討
論文審査委員 : (主査) 教授 大伴 潔
(副査) 教授 渡部 匡隆 准教授 山中 冴子
教授 倉持 清美 教授 橋本 創一

学位論文要旨

本論文の目的は、知的発達・言語発達ともに遅れない初回評価時 2 歳半～3 歳半の自閉スペクトラム症 (以下 ASD) 幼児と定型発達 (以下 TD) 幼児を対象とし、1) 象徴遊びのレパートリーの広がりや連鎖の発達過程を明らかにすること、2) 幼児の語彙の獲得や物語り発話の発達過程を明らかにすること、3) 象徴遊び行動のレパートリーや連鎖の発達と、獲得語彙や物語り発話といった言語発達との関連を明らかにすること、であった。

象徴遊びの発達過程においては、TD 群は象徴遊び行動のレパートリー数や象徴遊び行動の連鎖が年齢とともに増加していくが、ASD 群は増加に制約があり、徐々に違いが顕在化する過程が認められた。その背景としては、ASD 幼児は日常場面の出来事を他者の視点から捉え象徴化するという能力や、出来事のスク립トを結合させて一連の大きな流れを作る力に困難があることが挙げられる。

獲得語彙については、ASD 群と TD 群は獲得語彙の総量に差は無いが、一部の意味的カテゴリーにおいて獲得語彙数が少ないことが示され、背景として「限定された興味関心」や共同注意の困難さといった ASD の特徴が挙げられた。

物語り発話の発達過程においては、観察初期の 3 歳台の ASD 幼児は内容的な広がりを示すエピソードの生起頻度や、エピソードの連鎖である「順序」の生起頻度が TD 幼児よりも少ないことが示されたが、時間経過とともに群間の差がなくなり、発達過程は類似していることが明らかにされた。

象徴遊びの連鎖と物語り発話の関連については、両群で関連する時期は異なるが、両群ともに、象徴遊びの連鎖は物語り発話の連鎖と関連することが認められた。

象徴遊び行動の頻度やレパートリー数と獲得語彙数においては、TD 群は、象徴遊び行動が豊富な児ほど獲得語彙が豊富であるが、ASD 群は象徴遊び行動と獲得語彙の間に関連が認められなかった。ASD 幼児の象徴遊びと獲得語彙の間に関連がないわけではなく、自発的な遊びの評価した象徴遊びと、出現の有無を質問紙にて評価した獲得語彙では評価方法が異なるため、関連が認め

られなかった可能性が挙げられる。象徴遊びの連鎖における両群の発達過程の違いの背景として、ASD 幼児は日常場面の出来事を他者の視点から捉え象徴化するといった能力や、出来事のクリプトを結合させて一連の大きな流れを作る力に制約があることが挙げられる。一方で、自発的な象徴遊び場面において、ASD 幼児が持っている象徴遊びのスキルを表出しなかったという可能性もある。

また、ASD 幼児の自発的な特性や、象徴遊びよりも物の操作に注意が向くという興味関心の限定といった特性も象徴遊びにおける群間の発達過程の違いに寄与したと考えられる。このようなことから、自発的な象徴遊びと養育者が出現の有無をチェックした獲得語彙との間に関連が認められなかったと考えられる。遊び指示するといった課題場面や模倣により象徴遊びのスキルを評価した場合、両者に関連が認められる可能性がある。

また、本研究では、象徴遊び場面における幼児の自発的な発話に焦点をあて、事例的に ASD 群と TD 群の比較を行った。TD 群は年齢の上昇に伴い、自身の遊びや行動に関する発話を連鎖させて表出したり、人形にセリフを言わせたりナレーションをしたりと物語り発話様の表出が増えた。一方 ASD 群は、遊び場面において、辞書的に物の名称を言うことや、遊びに関連の無い発話が多く、遊び場面における自発的な発話に TD 群との質的な違いがある可能性が示唆された。この質的な違いは、相互交渉場面において、養育者から受けるフィードバックに違いをもたらす可能性がある。自発的な遊び場面において、遊びの内容に関する発話や人形のセリフ等の物語発話のような表出がある幼児の場合、相互交渉のパートナーは自然と幼児の発話に対して幼児の提示したクリプトにフィードバックを行いながら拡張したり、クリプトのつながりを促すような発話や遊びの提示を行ったりと足場かけを行っていることが推測される。ASD 幼児は、象徴遊びにおいて出来事を一場面で切り取らず、全体の大きな流れとして把握することや、出来事同士をつなげ遊びの流れを作る力の制約により、象徴遊びの連鎖の発達自体に制約があることが示された。また、遊び場面における自発的な発話においては、遊びの内容ではなく、物の名称を言うのみであったり、遊びとは関連の無い話をしたりすることが多かった。このような違いにより、ASD 幼児においては、遊び場面において TD 幼児よりも相互交渉の相手からの自然なフィードバックが得られにくいことが推測される。本研究からは相互交渉を行う側の大人は言語入力や出来事をつなぐの提示といった工夫を行うことの必要性が示された。